

謎めいた作品

海老原喜之助が一九二七年に発表した「ある作品」[図1]は、作品の意味内容だけでなく、作品を管理するという立場においても謎めいている。それはこういうことだ。当館は二〇一一年八月に「ある作品」のタイトルを《二人の女》から《姉妹ねむる》に変更した。当該作品が一九六二

年度に寄贈されて以来《二人の女》というタイトルを使用していたのであるが、ご遺族からの連絡を受けて、一九六三年七月の通称「自選展」[註1]で使用されていた《姉妹ねむる》に変更したのである——

ここで疑問が生じる。寄贈の年と自選展の年との間がそれほどないにもかかわらず、また当時はまだ作家本人が存命であったにもかかわらず、なぜ当館は《二人の女》というタイトルを採用したのだろうか。

実は強烈なタイトル

「姉妹ねむる」というタイトルは、動詞が動詞であることを強調している。加えて、「ねむる」という動詞は、能動性と受動性の狭間にある状態を表す面白い単語である。つまり、「姉妹ねむる」なる言葉は、見慣れ

た単語で構成されてはいるものの、作品タイトルとしては存外強烈なのだと言わざるをえない。

柳亮氏旧蔵資料

一般的に、作品のタイトルを調査する際に重要なのは出展時の資料である。幸いなことに、当該作品の初出展である「サロン・ド・レスカリエ 第10回展」の目録は、断片の形ではあれ、国立新美術館が所蔵している「註2」。しかもそれは、単なる「目録(断片)」ではない。海老原と親交の深かった美術評論家の柳亮氏が所蔵していたものなのだ。

この「柳亮氏旧蔵資料」(以下「柳資料」)が国立新美術館に所蔵された際、「目録(断片)」は、すでにある封筒の中に収められていたという。そして今回の調査で、その封筒およびもう一点の別の封筒の中には、当該作品のタイトルに関係する資料が複数入っていたことがわかった。以下、これらの資料を手短かに紹介することにして、各資料の詳細とその分析については稿を改めることとしたい。なお紹介の順序は、発行年や執筆年に依っては

資料一 「目録(断片)」

「目録(断片)」を見ると、作品番号が12から25まで振られている。そこに加えて、当該作品の図版が掲載されているのだが、ややこしいのは、その図版には「ebihara konosouke deux femmes couchées」

と書いてあるにもかかわらず、作品リストの中にはそのタイトルが見当たらない」と

だ。「13 femme couchée」はあるけれども、単数形であり、ふたりの女性<sup>3</sup>が横たわっている図像には普通使わない。

ところで、柳資料には同時に展示されていたマッシュモ・カンペーリの目録も収められている。それを見ると、そこにも図版があつて「les musiciens」のタイトルが添えられている。けれども作

品リストの方に一致するタイトルはない。

「2 les musiciens」はある。これは複数形で少なくとも一人が男性であることを意味している。しかし図版のタイトルの方は女性であることを意味していて、実際図版に確認できるのもふたりの女性の演奏家



図1 海老原喜之助《姉妹ねむる》1927年 油彩・キャンバス 75.2×102.0cm 東京国立近代美術館蔵

だ。この目録の作成者は、「Konosuke」と発音表記を間違ってしまう一方で、名詞の性数一致は正確だったということか。とすれば「3 femme couchée」と「deux femmes couchées」はそれぞれ別の作品を示している可能性がある。ちなみに当該作品がこの展覧会に出ていなかった可能性は、展評や画家本人の発言から除外してよい。

この目録から確実にわかるのは、発表当時のこの作品は「deux femmes couchées」と呼ばれていたことである。もちろん、当時の習慣を考えると、そのタイトルを海老原以外の人物がつけた可能性は考えなければならぬし、固定した、変更不可能なタイトルとしては流通していなかった可能性もある。

## 資料二 柳亮の自筆原稿①(自選展)

「ロッシェ・コレクシオンと海老原」と題された自筆原稿である。その内容から、「海老原喜之助自選展」のカタログのためのもので断定できる。「4」とナンバリングされた原稿の冒頭にはこうある。「パリでの彼のヒット作となった『眠り』(現在近代美術館所蔵)。また『9』にはこうある。「ロッシェ氏旧蔵の前述の『眠り』は、その最初の橋頭堡となった作で、一九二七年のサロン・ド・レスカリエ(コルベールが司宰した異色作家のサロン)へ発表されて非常な

好評を博した」。

興味深いのは、出版されたカタログではどちらの箇所も「姉妹ねむる」となっていることだ。つまり、執筆時に柳は当該作品を「眠り」というタイトルのもとに思い浮かべていたけれども、校正の段階において、「眠り」が「姉妹ねむる」に変更されたということになる。修正を指示したのが誰だったのか、それはもちろんわからない。

## 資料三 新聞の切り抜き

当該作品の図版の上下に「AU SALON DE L' ESCALIER」「Sommeil, par Ebihara」と書いてある(図2)。つまり当該作品が「眠り」という題名を持つものとして、あるいはそういうテーマを持つものとして紹介されていたことがわかる。なおこの図版は、今回の調査で、文芸新聞



図2 新聞の切り抜き(柳亮旧蔵資料より)  
写真提供: 国立新美術館

「コメディア(Comedia)」一九二七年七月七日号に、マルセル・ソヴァージュの展評とあわせて掲載されたものであることが判明した。

ともあれ、柳は自選展のエッセイを書く際に、この切り抜きを傍においていて、それゆえに「眠り」と書いてしまったのではないか。この誤記は、当該作品の正式なタイトルを当時の柳が知らなかったことを意味するとも言える。

## 資料四 海老原から柳宛ての手紙

熊本日日新聞社用箋に書かれていて、日付は、昭和□年一月十八日。「年」を記入していない。

四枚目に次のような記述がある(実際には縦の野線に対して横書き)。

- (1) 1922 - 26「床屋」
- (2) 27 - 28 (後略) 「Deux femme couchée」「曲馬」「狼の居る風景」(後略)

この記述から当時の海老原が当該作品を「Deux femmes couchées」として認識していたことがわかる。しかも「couchée」は「femme」の後に、校正時に語句を挿入するかのような線を引かれて書き込まれている。つまり、最初に文字を綴った段階では、「二人の女」と意識しながら書かれたのではないかと推測できる。

この手紙にはナンバリングのない紙も最後に添付されていて、そこには次のような記述がある。

- 1 1922 4月上京 1923年7月巴黎 1926 「床屋」
- 2 1927 - 1929 「曲馬」「Deux femmes couché」
- 3 1930 - 1934 (後略)

つまり当該作品は「Deux femmes couchées」として認識されている。しかも明らかに「couché」の語は書き加えられたとは見えない。最初のフェーズ案を写したからかもしれないが、言い換えれば、その際に特に疑問など生じなかったのだということになる。

## 資料五 「ロシア・メモ」

「株式会社サン興業」という社名の入ったレター用紙に次のような内容が書き込まれている。

「近代美術館所蔵 寝床の中の二人のロシア女 40号 色」

カタログか画集を編纂する際に書かれたメモだと推測される。「寝床の中の二人のロシア女」という言葉は、タイトルとして思い浮かんだのか、それともモチーフをより詳細に記述するために書かれたのか。作品を見る限りにおいては絶対にはわからない「ロシア」という情報が出てくることは注目に値する。

ロシア革命が起こったのは一九一七年のこと。それとともに多くのロシア人が亡命し、パリもその地であった。そんなロシア人の、女性二人が、寢床にいて目を閉じているところを、当時パリに住んでいた日本人の画家がモチーフにした……これはいったいどういうことなのだろう。

ひとつの可能性は、モデルとして雇っていたということである。今ひとつの可能性は、いわゆる娼館でこのような光景を見たという可能性である。後者の可能性を挙げてみたのは、あのロートレックの作品に《ベッド (Le lit)》(一八九二年頃、オルセー美術館蔵)という作品があつて、それが娼館で描かれたものであると考えられているからだ[註3]。海老原の場合は、当該作品の右側と同じような髪型をした人物が、一人目を閉じて横たわっている《臥婦》(一九二八年)という作品がある。だから前者の可能性が高い。

それにしても、この「ロシア・メモ」は誰の手になるものなのか。柳が書いたという場合、柳の勝手な推測でロシア女と書かれた可能性も捨てきれない。しかし、この美術評論家と海老原との関係を考えるならば、画家からこの絵にまつわるエピソードを聞いていたと考えることもそれほど無理はないだろう。もちろん第三者のメモを柳が預かったという可能性もある。

## 資料六 柳亮の自筆原稿②

当該作品が「二人臥婦」と呼ばれている。明らかに「Deux femmes couchées」の訳である。その内容から「毎日新聞」一九六三年七月十六日(夕刊)に掲載された記事の原稿であることがわかるが、そこでは最終的に《姉妹ねむる》として紹介されている。

## 資料七 「眠る」と書かれたメモ

熊本鉄道管理局の「モニタ報告用紙」に書かれていて、3とナンバリングされた紙にはこうある。

近代美術館

姉妹眠る カラー

グレンデ カラー

「眠る」と漢字が使われている。

## 真相は藪の中

いったいどのような経緯で「姉妹ねむる」なるタイトルが出てきたのか。それは現在確認できた範囲での柳資料からは断定不可能である。「二人のロシア女」が実際に姉妹であったのかもしれないが、真相は藪の中だ。柳資料を繙くことで当該作品はますます謎めいてしまったわけである。

そもそもここに描かれているふたりの人物像は、明確に女性性を強調されているわけでもない(少なくとも私はそう感じ

る)。時間帯もわからない。明らかなのは、ふたりの人物が、眼を閉じて、観客の視線を受けながらも、それを無視してベッドに入っていること、それだけである。そう見えるところが魅力のひとつだと思える作品を、なぜ画家は「姉妹ねむる」と題してその解釈の幅を限定したのか。その理由がわからないところもまた、この作品の謎のひとつであると言えようか。

(美術課主任研究員)

自筆原稿や手紙の引用を了承してくださった海老原喜之助、柳亮、両氏のご遺族に、心からの御礼を申し上げます。また国立新美術館美術資料室研究員の谷口英理氏の多大なる協力を得た。ここに謝意を表したい。

## 註

1 「海老原喜之助自選展」(一九六三年七月十七日―二十八日、日本橋三越)。なお本展は出品内容や主催者を変えながら、大阪、北九州、熊本へと巡回した。

2 この資料の存在については、「生誕一〇〇年 海老原喜之助 ― エスプリと情熱 ―」展(二〇一五年、鹿児島市立美術館他)のカタログに教えられた。

3 たとえばオルセー美術館で二〇一五年九月二十二日―二〇一六年一月十七日に開催された「Splendeurs et misères. Images de la prostitution, 1850-1910」展でも、このロートレックの作品は、娼婦たちの同性愛的な情景を描いたものとして展示されていた。

次号予告 2016年2-3月号 2月1日刊行予定

## 現代の眼 616

In focus ジョアン・ミロ《絵画詩(おお! あの人やっちゃったのね)》

Review

Re: play 1972 / 2015-「映像表現 '72」展、再演

栗木達介展

てぶくろ|ろくぶて

2015年12月1日発行(隔月1日発行) 現代の眼 615号

編集: 独立行政法人国立美術館 東京国立近代美術館

制作: 株式会社美術出版社

発行: 独立行政法人国立美術館 東京国立近代美術館

〒102-8322 東京都千代田区北の丸公園3-1 電話 03(3214)2561

表紙: 恩地孝四郎《あるヴァイオリニストの印象(諏訪根自子像)》1946年

木版、紙 42.5×34.8cm 東京国立近代美術館蔵

東京国立近代美術館賛助会員 (MOMAT メンバース)

SEIKO セイコーホールディングス株式会社 | 鹿島建物 | 三菱商事